

統一思想における神のロゴスと人間のロゴスの関係に関する研究

Jinsu Hwang, Ph. D.
韓国清心神学大学院助教授

- I. はじめに：ロゴスとは何か？
- II. 神のロゴス
- III. 人間のロゴス
- IV. ロゴス：単数か複数、静的か動的？
- V. 結論

はじめに：ロゴスとは何か？

ロゴスの概念は、古代ギリシャから伝えられてきた西洋哲学史と神学史に脈々とその地位が受け継がれてきた。ロゴスをめぐり、さまざまな言語学的起源と、さまざまな歴史的状況での別の意味が存在してきたが、Encyclopedia of Religionによると、次の3つの意味が普遍的に認められている。第一に“客観的意味”で、何かのための理性的基盤を意味する。第二に“主観的意味”で、理性的思考の力を指す。最後に、このような考えや理性が言葉や文章として表示される“表現された意味”がある。統一思想でロゴスを説明する方法も大きく見れば、このような伝統的意味と一脈相通ずる。統一思想によると、ロゴスは本質的に神から由来した“神の構想またはみ言”として定義される。“主観的”、動機的次元で統一思想のロゴスは、神の構想そのものであり、このような構想がそれぞれの創造物の根本的概念や観念になるために、ロゴスの“表現的”意味は、万物の理性的根幹としての“客観的”意味と相通ずる。

ロゴスが、個々の創造物だけでなく、全宇宙の理性的構造であるという考えは、ストア派の哲学者たちから主に発展した。ロゴスの概念がヘラクレイトスによって最初に考案されたと知られているが、今日の多くの学者たちは、この世界の究極的基盤あるいは法則としてのロゴスの概念は、ストア派によって定着したと考えている。特にストア派の哲学から出た“種子のロゴス (logos spermatikos)”の概念は、すべての存在は、“その存在にふさわしい発達の原則”が内在しており、これは、宇宙そのものにも適用されると説明する。ストア派哲学のロゴス概念は究極的権威としての“理性”に基づいており、この理性が自分の理性的システムを宇宙全体に染み込ませていると見るために、こうした概念は、自然に世界と理性を一致させる汎神論的宗教性を内包する。しかし、統一思想の観点から見ると、このようなストア派のロゴスの神は神の实在のごく一部の描写、つまり全宇宙が法則だけでのみ機械的に回っているという制限的説明に過ぎない。よく神の属性といわれる愛、同情、人格などはここでは居場所を失う。さらに、世界の中のすべての事件は、ロゴスによってただ起こるべき事だけが起こるようになってきているために、人間の自由の实在を疑うしかない、非常に決定的で運命的世界観を描くことになる。

ヘレニズム時代に広く受け入れられてきたこのような古代ギリシャのロゴス概念は、クリスチャンたちが、自分たちの信仰の正当性を証明するための手段として活用し始め、新たな局面を迎えることになる。キリスト教的文脈の中でロゴスは、もはやこの世界の原則、法則、あるいは理性としてだけに留まらず、実際の人間への具体化、すなわちイエス・キリストの

顕現に至る。これは、ヨハネ福音書の適切な象徴的表現によく表れている。神と同格であるロゴスが特定の時間と空間の中の歴史的人間として顕現したという信仰は、父と子の本質的一致というキリスト教の教義の三位一体の概念を難しくするのに使われたことは明らかである。また、これらの一致はロゴスキリスト論の形成へと導き、ストア哲学の特徴の一つであった神の創造物についての表現されていない考えとしての“内的ロゴス”と創造物に内在している表現された言葉としての“外的ロゴス”の区分を切り取る役割もした。しかし、キリスト教神学は、一人の人間が全宇宙とその中のすべての存在を“充滿した”存在に導く神のロゴスとどのように一致するかを難解な神学的用語としてしか表現できないまま、満足はいく説明を提示出来ないでいる。

統一思想が提示するロゴス概念は、その深さと一貫性という面では、どのような歴史的試みよりも優れている。本論文は、統一思想のロゴス概念を明らかにしようとする試みの中で、神のロゴスと人間のロゴスの関係に焦点を合わせている。ロゴスの本質を明らかにすることに注力しているが、統一思想が主張するロゴスのすべての様相を全て扱う包括的研究を志向していない。ただし、全体的かつ動的な、絶えず人間のロゴスと関係を結ぶ神のロゴスの様相に焦点を当てる新たな視点を提示することに集中している。このような観点から見た本論文は、次の三つの部分に分けられる。まず、神のロゴスを扱い、人間のロゴスについて論じた後、ロゴスは果たして単数概念なのか、複数概念なのか、固定的か動的かについての質問に答えようと思う。

神のロゴス

前述したように、統一思想のロゴスは、“神の構想あるいはみ言”として定義される。ここでは、この定義が意味するところが何なのかを包括的に明らかにする必要がある。統一思想でロゴスの様相を区別する2つの方式が存在する。第一に、神の創造目的を成し遂げようとする心情や愛を中心とした全体創造の考え、概念化、構想としてのロゴスと第二に、それぞれの創造物の“青写真”、すなわち神の創造構想の表現された言葉としてのロゴスに分割する。前者は創造の全体を主管する神の性相(心)の中で続く動的な思考プロセスを強調するものである。神の“原相”が絶対的で動的な“一つ”として存在すると考えたとき、これは神の創造構想が実際の創造の最初の瞬間に限定されるものではなく、創造の時空間的構造を超越することを意味する。つまり、神の創造構想はロゴスとそれに伴う万物の創造後に“留ま”らないということだ。創造世界が存在していく限り、神の創造構想は、新しい概念の創造、特に新しい人間個別相の創造を継続し、持続する。後者、すなわち、神の創造構想の結果としての表出された言葉は、“完成したロゴス”の静的状態を指す。これは、それぞれの創造物の最終的構想を意味し、こうしたロゴスはそれ自体で一つの創造物である。

ロゴスの様相を分けるもう一つの方法は、神の創造に関する構想、あるいは言葉としてのロゴスと神の内的性相における理性と内的形状における法則が結合した、すべての創造物に内在する“理法”としてロゴスに分割する。事実、統一思想はロゴスの区分において、この方式のみを提示し、上記で言及した最初の方式は、単に内在的に暗示されているに過ぎない。しかし、後で説明するが、動的ロゴスと静的ロゴスに分ける最初の方法は、神のロゴスの実在を明らかにするにおいて、非常に重要である。

統一思想で提示されたロゴスを正確に把握するためには、“創造の2段構造”を必ず扱う必要がある。創造の最初の段階は、創造目的を中心とした神の創造構想の形成である。統一思想は、これを“内的発展的四位基台の形成”と説明するが、その中心は創造目的、主体と対象はそれぞれ神の内的性相と内的形状、そして結果は他でもないロゴスである。基本的に、神の構想は、内的性相と内的形状の間の“内的授受作用”を通して現われる。神の内的性相は知情、意でなされ、内的形状は観念、概念、法則、数理的原理を示す。“心情”の神が抑えるこ

ことが出来ず愛を実現するための愛の実体対象を創造しようとする時、神は心の中に、それぞれの創造物の具体的観念を抱き始める。この段階で神の内的性相的要素、つまり知、情、意の中で知的活動が他の要素よりも目立ち、法則が主に作用する内的形状との授受作用を成しながら、創造される存在に対する根源的構造と原則としてのロゴスを生成することになる。

このような創造の最初の段階をもう少し深く分析してみよう。統一思想によると、完成したロゴスの創造を導く神の構想行為は二つの区分された段階を経る。つまり、前構想（PreLogos）の形成とロゴスの形成である。知、情、意でさなれる神の内的性相はいつも、統合的な“靈的統覚”として作用するが、求める創造物を構想するために必要な内的形状の観念、概念、法則、数学的原則と授受作用しながら、その創造物の“鑄型観念”を形成するに至る。このように生成された創造物についての観念は、必要な観念、概念、法則、原則などを精巧に備えた内的構造を持つことになる。しかし、このような鑄型概念はまだ静止写真と同じで、それ自体では生命力を持ったロゴスには及ばない。統一思想は、神の創造目的を中心とした内的発展的四位基台で形成された、このような鑄型概念を称して、前構想と呼ぶ。統一認識論によると、理性的思惟は、内的性相が内的形状の様々な観念を比較、対照する行為を通して可能であるが、これを“対称型”授受作用による“観念の操作”と呼ぶ。一つの観念操作が完了するたびに、その結果は実践的思惟になるだけでなく、一つの観念として再び内的形状に戻ることもある。人間の知識は、こうしたプロセスの繰り返しによって発展する。構想、つまりロゴスを形成するこのような反復的過程と共に、鑄型観念を生成する神の内的発展的四位基台は、基本的に心情を中心とした絶対的で永遠な内的自動的四位基台に基盤を置いているのは事実である。こうした神構想の要素、すなわち、反復性と永遠性を一緒にまとめて考えてみると、前構想の形成のための観念の操作は、構想と再構想の永遠の過程を経ると言えるだろう。これを創造物に対する神の絶対的慎重（prudence）だともいえる。すなわち、神は自分が本当に望む存在の創造構想を作成するために、絶えず考えているということである。前構想は、これらの神の絶え間ない思考プロセスが結び目となった結果を言うもので、完成したそれぞれの創造物の観念は、神の内的形状に刻印される。

しかし、まだ前構想は生命がない静的な鑄型概念であるため、次の段階は、この鑄型に生命を注入することである。つまり、観念がそれ自体で生きているようにすることである。創造の青写真は、今や神の心にある動的で生きた観念として表れている。統一思想によると、創造目的に起源する神の心情の力は創造物の種類に応じて他の水準の知、情、意の機能を前構想に注入する。すると、その前構想は生命力を得るといえる。それでは、生命の注入、つまり、神の内的性相の前構想への注入は何を意味するのだろうか？事実、神の内的性相は前構想を形成するために、すでに内的形状と授受作用をしており、前構想に生命を吹き込んでロゴスを創出するために、再び内的性相は内的形状に刻印された前構想と授受作用をするのである。すなわち、神の内的性相はロゴスを創出する過程の中で区別された2つの段階を踏むということである。

神の内的性相は靈的統覚として実現されるため、ロゴス形成の2番目の段階は、それぞれの創造物の前構想（鑄型の観点）の中に“靈”を吹き込むことで - そうすることによって、静的鑄型の概念を生きた“靈的な鑄型”にすることで - 考えて見ることができる。一方で、創造の第二段階で行われるロゴスと神の形状（前エネルギー）との結合は、ロゴスに“体”を投入するという解釈が可能である。生命は創造の第二段階で、最終的に実体化されるものであるため、ここで提案しようとする点は、すべての存在の生命の形成は二つの段階を経過するという点である。それぞれの存在は前構想の中への神の心、あるいは靈（内的性相）の注入によって靈的生命をまず得て、ロゴスへの神の体（前エネルギー）の注入を通して完全な生命を得ることになる。しかし、こうした方法の解釈はすぐに困難を迎えることになるが、何故ならば、前述したように、統一思想はロゴスを靈的鑄型として、前エネルギーを靈的な“融液”として見ているからである。ここで生じる一つの質問は、ロゴスは前構想という観念的鑄型と靈的融液としての内的性相、あるいは靈的統覚の結合として、そして実体的創造物は靈的鑄型としてのロゴスと肉的融液としての前エネルギーの結合だと解釈することがよ

り一貫しているのではないかという点である。つまり、- たとえ比喩的表現だとしても - 如何に“靈的”鑄型と“靈的”融液の結合で、“実体”が創造されるかという点である。これは、神は純粋な靈だと見るキリスト教的観点から導出される難しさを想起させる。

しかし、生命の流入を通じた前構想からロゴスへの転換を“肉体”と対比される“靈人体”の実際的創造だと解釈することは、統一思想の文脈から外れる。神の構想段階で生成されるいかなる存在も - たとえ非常に躍動感があふれるものだとしても - 実体的創造物と共鳴する観念、計画に過ぎないためである。神は絶対的関心を持って、創造の構想に自分を絶対投入される。創造物を構想するとき、その観念は神の全的な心に似て反映するため、まるで生きているかのような躍動感を得ることになる。統一思想は、このような生きた鑄型概念（ロゴス）を映画の中の主人公のような動的イメージで比喩する。しかし、動的イメージも数多くの静的イメージの連続的反映にすぎないため、生命を帯びたロゴスの真の生気を表現できないために、統一思想はさらに進んで、現実の世界の中の人物と対比される夢の中の人物としてロゴスを比喩する。もし、夢の中の人、あるいはそのある存在が生きた鑄型概念としてのロゴスを最もよく表している例だとしたら、ロゴスは、最終的にすべての存在が創造目的を中心として互いに調和を成して生きる理想的夢、あるいは靈的王国を意味すると想像して見ることができる。なぜなら、ロゴスの形成には、神の二性性相が具体的に注入されるために、ある存在に対する構想は、他のすべての存在との二性性相的關係が不可分の關係として連結されるためである。このような観点から見ると、ロゴスは、もはや静的青写真ではなく、創造の世界と共鳴する神の意識の中の生きている宇宙と見るべきだろう。

原理講論と統一思想によると、神が創造を決心された時、最初に人間の観念を考えられ、“人間の性相と形状を実体的に展開されて、まず、被造世界を創造された。”人間の実際の創造は創造過程の一番最後になるが、ロゴスの創造はそれとは正反対である。神の人間に関する観念は抽象的なものではなく、具体的な人間、つまり人類の最初の先祖であるアダムとエバのロゴスだったと統一思想は言っている。この点が意味するところは、神の意識の中で全宇宙に投影された生きているロゴスは、他にもないアダムとエバのロゴスだということだ。神の意識の中で創造に対する全体の計画は、生命を持ったアダムとエバの中に総合されているように、実体の宇宙も、この世界の中の実体アダムとエバの中に総合されている。原理講論は、“神は人間を宇宙を総合した実体相として創造された”と説明しているが、ロゴスも同様な方式で、次のように述べることができるようだ。神は人間（アダムとエバ）の観念を靈的天宙を総合した靈体相として創造された。

人間のロゴス

人間のロゴスは人間が神に似て創造されたように、神のロゴスに似ている。つまり、人間のロゴスは人間の思考（構想）とその実体的表現を指す。もう少し具体的に表現すると、理性の段階での内的発展的四位基台を言うもので、思考の発展をなす反復的過程の中でのそれぞれの四位基台の結果を意味する。したがって、人間の思考の本質に焦点を合わせながら、神のロゴスと人間のロゴスの關係を究明てみることにしよう。

統一思想によると、人間のロゴスは、思考あるいは思惟を可能にする“原意識”に基づいている。この原意識は、人間の細胞や組織の中に入り込んだ“宇宙意識”をいうのである。宇宙意識は感知性、覚知性、合目的性を持った根源的精神あるいは潜在意識であり、これは存在の種類に応じて、他の程度に適用される。人間においては、宇宙意識が細胞と組織に注入にされることによって原意識に作用し、原意識は創造目的の達成に向かって初めて作られる人間の心の基礎になる。統一思想は、まさにこの宇宙意識、つまり原意識が存在の肉体的構造を生きている存在に変換させる“生命”と同じものだと見る。これはまるで土で作った人間に神の息吹を注入させて生命を与えたのと同じである（創世記 2:7）。生命として宇宙意識

はロゴスの二性性相に似て、性相と形状の構造になっているが、まず、宇宙意識の形状は、各生物の中のDNAと呼ばれる特有な有機構造として表示される。DNAが生命の形成において必要不可欠な要素であるが、DNAはただ特定の構造を持った塩基水でそれ自体では、生命の起源と見ることはできない。したがって、DNA構造を読んで生気を吹き入れるために必要なものは、宇宙意識の性相であるが、これはDNAの心と表現されることもありそうである。生命はこのような内的な原意識とその外的形態、すなわちDNAとの間の授受作用を通して発生する。

DNAは体の発達を指揮し、統一思想によると、原意識はDNAの情報に基づいて、細胞と組織の活動の内的仲裁者の役割をするために、宇宙意識は、このような生命の二性性相の要素の起源として、ただ人間だけでなく、すべての生命体の存在の根本的期待だと言うことができる。それでは、こうした宇宙意識（原意識）がロゴスそのものと見ることができるだろうか？統一思想は原意識を“低次元の宇宙心または低次元の神の心”と表現している。ここで低次元と言った理由は、人間の心の多くの機能の中で感知性、覚知性、合目的性に限った原意識の機能のためである。しかし、宇宙意識は - チルリヒの表現を借りれば、 - まるで“存在の基盤 (ground of being)” のようで、全宇宙を抱えていることは明らかである。ここで、統一思想は、自意識から本然の概念を弁証法的に把握していく (begreifen) ヘーゲルの“精神 (Geist)” をどのように解釈しなければならないかについてのヒントを提供する。内的原意識（潜在意識）から明示的自意識への転換がまさにそれだ。このような観点から、ヘーゲル哲学を眺めると、ヘーゲルは、原意識と自意識の関係を彼の哲学的文脈全体に拡張したものと解釈できるだろう。その中で、彼の神は - 統一思想が指摘するように - 単に観念 (Idea) あるいはロゴスに置換されてしまう。

宇宙意識がロゴスそのものかに対する質問に対して特に反論をすることは困難と思われる。統一思想は、宇宙意識を神の心と見るために、宇宙意識を創造目的を中心とした神の構想、つまりロゴスと言うことができる根拠が作られている。人間にとって原意識とDNAで表われる宇宙意識の二性性相は、ロゴスの二性性相、すなわち、神の内的性相と内的形状に似ている。違いといえば宇宙意識は、何よりもすべての存在を支える生命力を強調するが、ロゴスは、理法としての特徴に焦点を当てているという点だ。しかし、両者とも全体の創造に対する神の意識を表しているのは明らかである。

低次元の神の心としての原意識はまるでロゴスを抱いている生命の種のようなものである。また、ロゴスのように、この種は、二性性相で存在する。原意識の二性性相的存在は、既存の認識論で解くことができない問題に対する新たな解釈の可能性を提示してくれる。統一思想でも言及するように、既存の認識論で最も代表的問題は、経験的知の方式と理性知の方式の衝突だと要約することができそうである。前者の経験主義的方式の極端な例は、バークレー (Berkeley) の哲学で見つけることができる。彼はひたすら主観的に知覚された、すなわち、経験されたことだけを受け入れるべきだと主張したが、そのように認識された“もの”の客観的存在は否定した。(esse est percipi) ヒューム (Hume) は心の存在さえ疑いながら、経験主義は、実体そのものを否定する懐疑主義の道を開いてしまう。後者の理性主義的アプローチの極端な例は、ヴォルフ (Christian Wolff) の哲学に見ることができるが、彼は経験的認識では真理に到達することができず、ただ思弁的方法でのみ真理に到達できると主張した。こうしたヴォルフの哲学を強く批判した人物がカントだった。カントは、ヴォルフの哲学を理性的独断主義と批判しながら、経験主義と理性主義の間隙を彼の超越的観念論で克服しようとした。超越的観念論は、私たちの心の中に経験的認識と悟性を可能にする先験的枠組みと条件が存在することを主張することで、知識の主観的、客観的様相の全てを和解させようとした。しかし、これは完全な解決策になることができない。なぜならまだ経験主義と理性主義の対立が、その物自体と現象という区分の中に残っているからだ。未知の領域の物自体は懐疑主義の様相を払拭できておらず、心の中の先験的条件は、ヘーゲルが批判したように、自主的になぜそのように存在しているのかに対する合理的基礎を備える

ことができないことによって、いまだ理性の独断性を内包している。統一思想の原意識とその二性性相は、上記の問題を解決することができる糸口を持っている。原意識はカントの先験的カテゴリーのように、ただ心的構造を示さず、心と体の統一体をいう。原意識は“原映像”と“関係相”で構成されているが、原映像は、人間の体の属性とさらに進んで、実体世界のすべての存在の属性を反映する心的映像である。関係相は人間の体とすべての生命体の属性間で表れる関係構造の反映である。原映像と関係相は、すべての宇宙の縮小体（microcosm）としての人間の体と離れることがない関係でつながっている。体の属性の心的映像としての原映像は認識の先験的概念として作用し、逆にその先験的観念は宇宙の縮小版としての体の属性から来たものであるため、外部世界の事物の内容に対応する。宇宙の縮小版である体の属性の関係に関する心的映像としての関係相は、認識の先験的構造、すなわち思惟の構造として作用する。これは、同様に外部世界の万物の属性の関係と対応する。このように、原意識で原映像と関係相の統一は、判断の基準としての“原意識相”を形成し、原意識相なしには、いかなる認識も不可能である。統一認識論は、このようにカントの先験的カテゴリーを克服（sublate）することができる真の具体的基盤を提供する。再び物自体の不可知論的領域に帰らなくてもいいことは、もちろんである。原意識はひたすら理性システムだけでなく、経験的入力だけでもない。現実世界に存在するもの - 宇宙全体に反映された人間の体 - に具体的な基盤を置いた、認識の必須的要素、すなわち、形式と内容の超越的統一を指すのである。つまり、原意識は内的と外的、理性と経験、あるいは主体と対象の本質的統一を抱えている種であるわけだ。

原意識の実在は神のロゴスのそれと似ている。神のロゴスが全世界の中のそれぞれの存在を投影する生きた種子であれば、原意識は全体の創造世界の形式的/内容的情報を含んだ生きた種子である。神がこの世界を創造されたとき、神のロゴスは全的認識の中に神ご自身と完全に一つであるほどに完璧なものだった。（ヨハネ 1:1）しかし、そのような神のロゴスに似た原意識は、人間のロゴスの“無意識的”基盤、すなわち“低次元”の神の心である。つまり、原意識を基盤にした人間のロゴスは、成長期間を通して多くのことを愛で経験しなければならず、それによってその無意識的原意識を創造目的を十分に理解する成熟した自意識へ転換しなければならない。こうした成熟の過程を通じて人間のロゴスは創造目的をどのように達成するか絶え間ない悩みの中に、自分の深さを表す。また、人間のロゴスは心的行動だけにとどまらない。神のロゴスが絶対的統一性（absolute oneness）の中で考えられ、言葉で表現されるように、人間のロゴスも形成される瞬間、つまりある構想が生成される瞬間、その構想は、実践的に実現することができる生命力を得ることになる。これが人間の思考が行動の様相と見なされる理由である。何もしないという決定も、現実の中で生成された一つの行動だと見ることができる。

ロゴスの観点から、私たちの生活を眺めた時、それは明らかに、神のロゴスに似るために、人間のロゴス（行動としての思考）を成熟させていく過程である。人間のロゴスに神のロゴスは（原意識を通して）すでに内在しているが、人間自らが愛を中心に、世界の中で神を経験することで、神のロゴスと人間のロゴスの一致をなさなければならない。これまで議論された内容をまとめてみると、神のロゴスは、静的観念や概念ではなく、動的であり、持続的な創造構想であることを知ることになる。宇宙意識あるいは原意識に含蓄されている神のロゴスは、人間のロゴスを通して中断のない創造過程の中で、新しい概念を発展させる。人間のロゴスが創造的に、創造目的を実行しようとする限り、神のロゴスは人間のロゴスの基盤となるだけでなく、創造理想を完成しようとする動きの中に参加する。つまり、神は私たちの神に関する考えの中で一緒に考えておられる。

ロゴス：単数あるいは複数の、静的あるいは動的？

もし神のロゴスが創造の瞬間に完結するものと理解すれば、神の創造に関する考えはその瞬間 - おそらくビッグバンの瞬間 - に停止したという多少、不条理な結果と向き合うことに

なる。統一思想は、ロゴスが創造の瞬間でのそれぞれの創造物に対する構想や計画だと説明しているのだから、神がロゴスをまず完成、完結した後、そのロゴスによって創造をしたかのように思われる。このような観点から見ると、それぞれの創造物の青写真としてのロゴスは創造“前”に、神の心の中に存在したにちがいない。厳密に言えば、ロゴスは神の内的形状に刻印されたあらゆる創造物についての霊的鑄型を指すものであり、神の形状（前エネルギー）と結合して、実体的に創造される。統一思想によれば、このような霊的鑄型の数は数え切れないほど多く、それぞれは“個別相”と呼ばれる独特な存在となる。特に個々の人間は唯一の存在であるため、人間のための霊的鑄型は必ず一度だけ使用されると見る。神の創造のみ言は、単純に分節された単語の合ではなく、絶対的統一性の中での連続的全体として理解する必要があるため、ロゴスも全体的な視点からアプローチする必要がある。数え切れない霊的鑄型が創造目的を中心として非常に洗練された二性性相的授受作用をしているのが、ロゴスなのである。したがって、先に述べたように、神のロゴスは神の意識の中に投影された、神の二性性相がいったいに染みている、また、実体世界と共鳴する生きた宇宙である。

ここで、1つの質問が次のように提起されうる。もしすべての創造物が“完成したロゴス”で構想されたならば、過去、現在、未来のすべての創造物-2013年現在、生きている自分自身を含めて - の霊的鑄型がこの世界が創造される前に、既に創造されていたことを意味するだろうか？もしそうだとすれば、特定の時間と空間の中で生きている私という存在が、創造前に既に“決定”されていたのだろうか？別の言い方をすれば、神のロゴスは創造の瞬間以前に最初で最後に決定されて固定されているのだろうか、それとも変化し続けるのだろうか？これは決して簡単な質問ではない。なぜならこの問題は、神の予定、予知など複数の神学的主題とつながっているからだ。ここでは、ロゴスの動的な様相だけを強調したい。

ロゴスの観点から見れば、人間は他の如何なる存在より理性が法則より優位になるように創造されているために、はるかに自由である。理性が法則と調和をなす限り、人間は、自分自身の道をいくらかでも選ぶことができる。存在論的に言えば、この言葉はすなわち、人間の選択が創造世界の実体的形成に多くの部分で影響を与えるというのだ。原理講論の予定論を見れば、神の（復帰の）意味は“中心人物が担当すべき5パーセントの責任分担が加担してこそ、それが成就されるように予定れる。”復帰過程は、まさに再創造過程であるため、神の創造目的を成そうとされる絶対的意志（予定）は、人間が責任を果たすかにかかっている。

このような現実、人間の個別相の誕生にも影響を及ぼす。もし私の父と母が新しい子を持つことにお互い同意しなかったら、私という存在はまったく生じなかっただろう。ここで2つの可能性を考えてみることができる。まず、1) 神は、すべての“可能な”人間に対して - 実体になるかならないかに関わらず - 数え切れないほどの霊的鑄型を、この世界の創造前に既に構想されたという可能性と、2) 神は（常に現在の時制で）それぞれの人の誕生の瞬間に、その人のための生命力を持った霊的鑄型を構想し、語られるという可能性である。最初の可能性は、神のロゴスは創造以前に完全に完結、固定されているという意見を支持するものであり、2番目の可能性はロゴスが実体世界と絶えず共鳴しながら、新しい存在の概念を持続的に構想するという観点を支持する。

原理講論と統一思想の全般的文脈 - 特に、復帰摂理歴史の中の悲しみの神、恨の神という観点 - から見た時、2つ目の可能性がより説得力を持っていることは事実だ。この世界全体が創造目的を達成するための継続的過程であると見た時、上記の“創造の瞬間”は、そのような持続的過程の中での生命創造の瞬間として解釈しなければならない。したがって、神のみ言としてのロゴスは、この宇宙とダイナミックに、継続的に共鳴して参加しているとみるのが正しいだろう。神の絶え間ない新しい存在の構想という側面で、神のロゴスがこの世界に参加しているという話は、まさに人間のロゴスに参加しているということにもなる。なぜなら、人間の責任達成につながる人間のロゴスは、新しい存在の構想創造に必要な不可欠な要素だからだ。

結論

ロゴスは西洋哲学史と神学史全体において、非常に影響力があり、重要な概念である。しかし、ロゴスの実在に対する満足のいく説明を見つけるのは難しいのも事実だった。統一思想は、多くの部分でロゴスを深く理解することができる新たな観点を提示している。本論文では、統一思想でのロゴスの概念を明らかにするところに焦点を合わせて、特に神のロゴスと人間のロゴスの関係に注目している。神のロゴスは、神の心の中に生きている創造に関する構想、すなわち、それぞれの創造物に関する霊的鑄型を意味し、絶対的統一性の中に存在する神を考えたとき、このロゴスは、創造目的を中心として、神の心の中の霊的に生きている宇宙全体、つまりすべての創造物の観念が二性性相的にお互い調和関係を結んでいる - しかし、アダムとエバの観念に含蓄される - 全体として理解しなければならない。人間のロゴスは、こうした神のロゴスに似て理性段階の内的発展的四位基台を意味し、特に考えの発達をなす四位基台の反復的過程でのそれぞれの結果をいう。人間の思考は、原映像と関係相でなされる原意識に基づいているが、原映像と関係相すべての宇宙の縮小版としての人間の体と不可分の関係を結んでいる。したがって、原意識は生命力を帯びた神のロゴスを基底に抱いている最も根源的種子のようなもので、人間の考え自体を可能にするだけでなく、実践的思考を通して前提創造物と共鳴関係を結ぶようにしている。このような観点から見たとき、神のロゴスは宇宙創造以前に最初で最後に完成された固定された創造構想と解釈できるだけでなく、歴史の神の心の中で起こる生命のみ言が、人間のロゴスに超越的に参加すると見ることできる。こうした神のロゴスは人間の自由と責任分担により、ダイナミックに変化するこの世界の中で、新しい存在観念を絶えず誕生させる歴史の中で息づくみ言なのである。

Bibliography

統一思想研究院. 統一思想要綱(頭翼思想). ソウル: 成和出版社, 1993.

Unification Thought Institute. Essentials of Unification Thought: the Head-Wing Thought. Cheonan, Korea: Sunmoon University, 2002.

HAS-UWC. Exposition of the Divine Principle. Seoul: Sung Hwa Publishing, 1996.

Hegel, G. W. F. Introduction to the Lectures on the History of Philosophy. New York: Oxford University Press, 1985.

—————. Lectures on the History of Philosophy, Vol. 3: Medieval and Modern Philosophy. Lincoln: University of Nebraska Press, 1995.

Jones, Lindsay. Encyclopedia of Religion. Second Edition. Farmington Hills, MI: Macmillan Reference, 2005.

Magee, Bryan. The Story of Philosophy. London: A Dorling Kindersley Book, 2010.

Russell, Bertrand. The History of Western Philosophy. New York: Simon & Schuster, 1945.

Taylor, Charles. "Hegel and the Philosophy of Action," in Hegel's Philosophy of Action, ed. Lawrence S. Stepelevich and David Lamb. Atlantic Highlands, N. J.: Humanities Press, 1983.

Tillich, Paul. Systematic Theology Vol. II. Chicago: The University of Chicago Press, 1967.